

お墓は今後どうなるか

目次

- 1 目的と結論
- 2 紀貫之の心の推移
- 3 お墓の起源と歴史
- 4 お墓の今後

(画像は無料イラストサイトから借りた)

1 目的と結論

目的：

Z世代という言葉がある。生まれたときからデジタル機器に囲まれており、あたかも「スマホが社会への入り口である」と考える世代である。

従来、自分の能力をたかめ、社会に認められることをとおして社会的居場所が確保されたと考えたが、Z世代は多くの情報の中から有利な立ち位置をさがしだし、その位置をうまくわたることをとおして相対的に有利な居場所を探し求める。彼らに努力とか頑張りは似合わない。



結論：

Z世代が多数を占める社会においてお墓はどうなるのであろうか。

お墓をもつことは精神的自慰行為である。人類は、有史以来、お墓がつくり、その前で死者にむきあった。人が人である限りお墓がなくなることはない。

2 紀貫之の心の推移

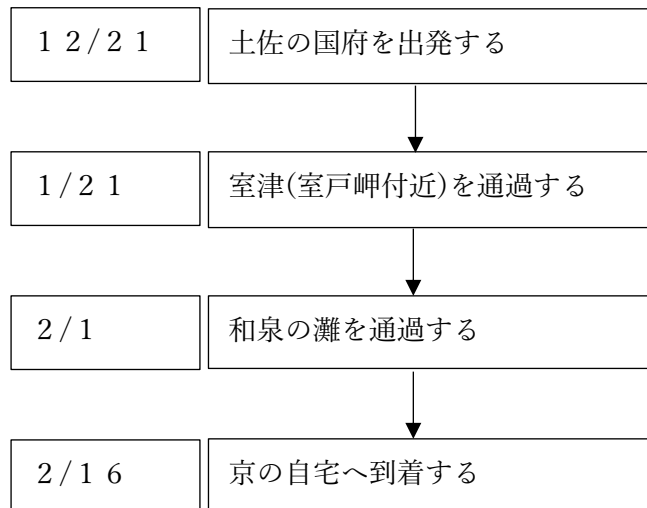
2.1 土佐日記のあらまし

紀貫之（きのつらゆき）という人を知っているだろうか。

平安時代の下級役人である。土佐国主としての任務を終え、934年（承平4年）12月21日、土佐を出発し、翌935年（承平5年）2月16日、京の自宅へ到着する。

その後、現在、「土佐日記」といわれる書をかいた。ここでは土佐で亡くした娘を悼む書として紹介する。

旅行のあらましを紹介すると次のとおりである。



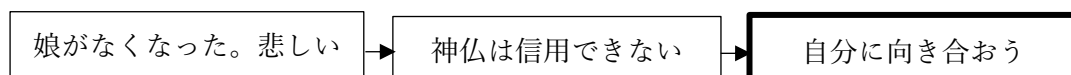
2. 2 破り捨てるとはどういうことか

紀貫之の娘をおもう気持ちは、土佐から自宅(京)へのあいだ、三つの段階をたどった。

第1は土佐から和泉までである。なんども「帰路、娘がいない。悲しい」となげく。

第2は船が和泉(現大阪)を北上するときである。その陸地には住吉神社があり、神の支配地である。暴風雨にあう。神の機嫌をなだめるため、お札を海に投げる。しかし収まらない。そこでお札より高価なカガミを投げ入れる。すると止んだ。「物の価値で判断する。神仏は信頼できない」と認識する。

第3は、自宅(京)に着いたあとである。土佐に行くまえに娘がいた。しかし、今、いない。このとき、現代にも通じる境地にたどりつく。



第3の段階が本稿に関係する。

2月16日、京の自宅へはいる。そこに、土佐へいくときには元気であった娘がいない。そこしれぬ淋しさがおそってくる。そして「この日記をやぶりすてよう」と書く(実際には破り捨てなかったため現在に伝わる)。淋しさをいやすためにちょっと気取ってひらかなで書いてみた日記も、結局、自分の心を慰めてはくれない。自分の心に向き合い、そのなかで娘を悼むことでしか自分を救う方法はないと覚悟する。



3 お墓の起源と歴史

3. 1 死者と生者の関係の変化

動物は、群れをつくって行動していても、仲間が死んだ場合、仲間を放置する。たとえば鮭は群生して太平洋を移動し日本の川を遡上するが、仲間が死んでも、何ら向き合わない。

ところが、人は、かつて生きていた者が死者になり死体が腐乱していくのを見て、その姿を恐れる。あなたも次のように変化していく、かつての生者をみると怖いと思うに違いない。

24時間後 体内で発生する腐敗ガスによって
腹部や顔面から変色がおきる

48時間後 全身の腐敗が進行し
皮膚が割け腐敗臭が発生する

そこで、人は、死体を遠くに運んで捨て、あるいは土の中にうめた。さらに、念を入れて、死体のうゑに石を置いて生き返らないように処置した。死体のうゑに置いた石が墓石の起源である。

死体の処理は時代の進展とともに変わった。日本では西暦700年ころ天皇の死体をいったん燃やし、残った骨を埋めるようになった。庶民の死体が燃やされたのはいつかわからない。燃やす作業は集落の共同作業として行われた。集落のなかで「担当者」が決められ、担当者は炭と木材の上に死体を置き、炭に火をつけ、死体を燃やした。適度な時間の後、親族が骨を拾いに行った。

腐乱する死体を視なくて済むようになったことは生者の死者に対する気持ちに変化をもたらした。死者が年長者である場合、「膝の上に載せてくれた。その膝は暖かった」「淋しかったとき抱きしめてくれた」などを思い出し、年少者である場合、「目がくるくるとしてかわいかった」「一緒にふろに入り水かけっこをした」などを思い出す。死者を悼む気持ちが醸し出される。

起き上がることを阻止するための石は、死者を思い出すための親和的な石になり、その形は生者の経済力とともに、文字が彫られ、大きくなり、形が整えられた。

3. 2 神道および仏教の影響

日本にかんするもっとも古い記録は、魏(中国)の歴史書「魏志倭人伝」であるが、そこにえがかれた倭のことは事実として確認されていない。時代は降りるが、日本のなかで描かれた最古の歴史書は「古事記(712年)」である。この書は現代の日本社会にも影響し続けている。

(1) 神道の影響

神道では、たとえば、朝、南風がふき、大気が暖かくなってきたとしよう、この現象を、人が納得するために、神を介在させる。すなわち、統治者は「神が南風をふかせた」と被統治者にいうのである。ここに風の神が生じ、次々と神が生じ、八百万の神となる。

お墓に関する神道の考えは、庶民に関しては、そのとき行われた風習を是認する。神社は神聖な場所であり、そのなかに死者を入れることはしない。たとえ神道式で葬式をした場合であっても、お墓は公営墓地につくる。

（２）仏教の影響

仏教は、538年、百済より伝わった。大和朝廷は「これは、国家統制のための思想教育に使える」と判断し、僧を育て、寺を立て、寺に財政的基盤(荘園)をあたえた。1175年、法然は、「仏教は国の治安手段ではなく、個人の幸せのためにあるべきだ」と考え、旧来の仏教に反旗を翻した。法然の浄土宗にひきつづき、親鸞の浄土真宗、日蓮の法華宗、道元の禅宗などはみずからの仏教を確立し、信者を獲得しようとした。

徳川幕府はキリシタンを弾圧するために、「キリシタンではない」ことの証明として、住民を登録する制度をつくった。さらにキリシタンだけでなく全国の住民を寺に登録させ、住民をはあくする制度(檀家制度)をつくった。これによって僧は布教しなく済むようになった。収入は安定した。僧は妻帯するようになり、世襲がおこなわれた。僧の仕事は葬式を取り仕切ることになったのである。

仏教とお墓との関係は、現在、檀家制度崩壊の過程にある。すなわち、僧の指示に従わない葬式が行われ、寺の境内ではない場所にお墓を作る傾向が強くなっている。

（３）紀貫之の宗教観

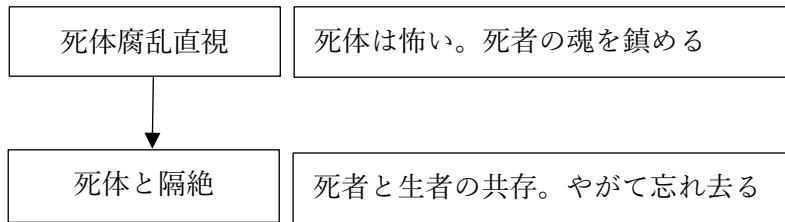
紀貫之は、平安時代末期の人であるが、神仏など何の役にも立たない、日記を書いて心を紛らわせようと思ったがそれもダメだ、みずから死者に向き合う以外に娘を悼む方法はないという境地にいたった。

4 お墓の今後

4. 1 悼む

生者は、腐乱していく死体を視なくても済むときから、死者をなつかしみ、死者の教えを思い出し、現在の自分の心の浄化に役立てるようになった。おそらくあなたは、お墓で手を合わせると、こころが落ち着き、あるいは静かな勇気が湧き上がることに気付くであろう。これが悼むことである。すなわち、死をなげきかなしみ、死者に想いをいたし、そこから学ぶのである。

さらに、時間の経過とともに死者を自然と忘れていくであろう。一年、三年と経過するにしたがい死者を想いださなくなることは人間の叡智である。二十年、三十年を経過しても深刻に思い出す人は、むしろ、精神的に課題を抱えているともいえる。



4. 2 いろいろなお墓

2024 年 2 月 11 日(日)、NHK で「家族が眠る真珠～三重県・英虞湾から～」という番組が放送された。

遺族は、死者の遺灰を貝にいれ、三重県・英虞湾で真珠に育てる。この手伝いをする主宰者の姿と遺族との話である。真珠ができていることを願って待ち、6 ヶ月後、貝をあける。そのとき、遺族は真珠に死者の姿をみる。

さまざまな形のお墓が開発されており、今後も開発されるであろう。

それが死者を思い出す「何か」であればいいのである。石材の必然性はない。材質も見栄えも場所もこだわらない。

ただし、ものとしての何かである必要がある。ものには安定性があるからである。ものがあれば、生者は「亡くなってから〇年経つから子孫で集まろう」と思いやすい。ものの前で死者を思い出すことによって、生者は精神的安定を得るであろう。

海、宇宙への散骨など、ものでない場合、思い出すきっかけが薄れるであろう。死者を思い出すきっかけがない場合、精神的安定性を失することになる可能性がある。

4. 3 死者と自分

最後に Z 世代といわれる若者たちを考えよう。

今後、デジタル機器が大きな位置を占めるであろうが、それをとおして社会とつながることは当然である。

しかし、人間関係（両親、親族、知人など）が変わるわけではない。父は父であり、母は母であり、妹は妹であり、先生は先生である。したがって死者を悼む方法に変化はあるだろうが、悼むことが希薄になるとか、あるいは消滅することとは関係ない。

付記する。

昨今、「墓しまい」とか「無縁仏」とかがマスコミで騒がれている。日本の人口が減少し、あるいは格差が拡大しお墓を持つ経済的余裕のない人達が増えていることに原因がある。これらの外形的な原因は今後ともつづくであろう。お墓の数が少なくなるとともに、形、価格、場所など種類が増えるであろう。

以上